田辺聖子「十七のころ」追考：樟蔭女子専門学校時代の「日記」による

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2022-03-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 中, 周子
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4847

田辺聖子「十七のころ」追考

―樟蔭女子専門学校時代の「日記」による―

中　周子

一、はじめに

令和三年―奇しくも三回忌に、田辺聖子が樟蔭女子専門学校時代にノートに書き付けた日記が発見された。ノートには、「十八歳の日の記録」（以下、「日記」と略す）という題が付され、昭和二十年四月一日（二年生の開始日）から昭和二十二年三月十日（三月八日の卒業式後に就職先を尋ねた日）までのことが書かれている。[1] 作家田辺聖子の重要な伝記資料であると同時に、戦時下の諸相や樟蔭の教育をも知り得る貴重な日記である。

「日記」には、樟蔭女子専門学校時代に書いていた小説についての記述も多々見いだせる。その中に「十七のころ」という作品がある。この作品の原稿は、後述するように現存している。かつて「十七のころ」について、田辺文学の原点として貴重な作品であることを論じたが、執筆事情については解明できないでいた。[2] ところが、この度、発見された「日記」には、昭和二十一年から昭和二十二年にわたって何度も「十七のころ」に関する記述が見出される。それらの記述を繋ぎ合わせれば、これまで謎であった成立事情および執筆の背景が見えてくる。さらに、「十七のころ」が、田辺聖子にとってどのような意味を持つ作品であったかが分かる。本稿を、「日記」の出現によって明らかにし得た「十七のころ」に関する追考とする所以である。

二、「十七のころ」にまつわる謎

田辺聖子は、作家になる以前の少女時代の習作に深い愛着を抱いていた。それらの作品は、自伝的小説やエッセイにおいてしばしば取り上げられ、詳しく引用されることもある。[3]「十七のころ」についても、自伝的小説『しんこ細工の猿や雉』の樟蔭女子専門学校時代を描いた箇所に、「校友会の文芸部長のようなものを押しつけら

れた」ために機関誌を発行することになったことを記し、その製作の様子と掲載作品の題名と内容を紹介している[4]。

生徒はどんどん短歌や俳句を投稿してくる。そうして、

「本はいつ出ますか」

と期待して聞きにくるのだった。仕方ない。

まだ町には印刷屋もないので、学校から原紙と紙をもらい、生徒が交代でガリ版を切った。下級生の保育科の人が、芋版で表紙のイラストを仕上げてくれて、ハカナゲなガリ版の機関誌「青い壺」はでき上った。

百五十冊刷ったが、またたくまに売れてしまった。誰もかれも読み物に渇えているらしかった。

小説がないと恰好つかない、というので私はここに「十七のころ」という短編をのせている。これは十七歳の泉という、口数少ない、おとなしい夢みがちの女の子と、俗人の代表のような両親との対比をねらった小説で、それだけのものである。われながら低調で冴えなかった。

昭和二十年、第二次世界大戦が終わった後、学園は活気を取り戻し様々な校友会活動が活発に行われるようになる。そんな中で、田辺聖子が中心となって編集し発行された雑誌が『青い壺』であるという。

幸いにも、『青い壺』は現存しており、本学の図書館に所蔵されている[5]。表紙のイラストは青い壺で、体裁はガリ版刷りである。目次には「樟蔭女専文学研究班」と記され、奥付には「編集責任者田辺聖子」とある。上記の引用文の通りである。

ところが、『青い壺』に掲載されている田辺聖子の作品は「ゆみ子」と題する短編であり、「十七のころ」ではない。主人公の「ゆみ子」は二十歳で、彼女の淡い恋を描いた作品である。「十七のころ」とは全く別の作品が掲載されているのである。

さらに、「十七のころ」と題する短編も実在し、田辺聖子文学館に寄託されている[6]。主人公は十七歳の寡黙な少女・泉で、旧弊な両親との対立が描かれており、『しんこ細工の猿や雉』に書かれている内容と一致するのである。この資料は、『しんこ細工の猿や雉』の執筆資料をまとめた箱に保存されていたことからも、同書に引用された「十七のころ」であることは間違いない。

では、何故、現存の『青い壺』に「十七のころ」は掲載されていないのか。『青い壺』と題する機関誌も「十七のころ」という作品も伝存しているにもかかわらず、両者の関係も、執筆経緯も謎のままであった。

ところが、このたび発見された「日記」には、「十七のころ」や『青い壺』に関する記述が見られるのである。まずは、それらの記述を辿ってゆくことにする。

三、「日記」にみる「十七のころ」と『青い壺』

『しんこ細工の猿や雉』に「校友会の文芸部」とあるのは、「日記」

にいう「校友会の文学班」のことである。現代の読者が理解しすいように「文芸部」と書き換えたと考えられる。実際は「文学班の班長」であったことを、小説では「文芸部長のようなもの」と書かれていることからも、読者の理解を得るために言い換えていることが分かる。「日記」中に「文学班」のことを最初に記しているのは次の条である。

《昭和二十一年五月十五日》

校友会の文学班の班長に、いやいや皆から推された私は、渋々きょうの総会で、皆に懇談会を開いた。顧問の本城先生は、中々の篤学者で、本をたくさん持ってらっしゃるので、読書案内をお願いする。

この「日記」の記述は、前述した『青い壺』の目次の頁に「樟蔭女専文学研究班」とあり、奥付に「編集責任者　田辺聖子」と記されていることに一致する。また、「文芸部」と「文学班」等の小異はあるが、前引した『しんこ細工の猿や雉』に描かれた件に相当する実体験の記であることは間違いない。

「日記」には「いやいや皆から推された」と簡単に書かれた体験が、『しんこ細工の猿や雉』では会話によって描かれる。

「わたし、いややわ。そんなん、きらいやねん」、「むりにさしたら、泣いたるから」という抵抗もむなしく、「ええやないの、ややこしいことができたら、わたしらで肩代わりするから。ともかくあんたはいつも小説書いてるし、文学趣味があるんやから適任やないの」と言いくるめられて、結局、文芸部長を引き受けてしまうという様子が活写されるのである。

この日以降、「日記」には何度も「十七のころ」に関する記述が見出せるのであるが、次の条には、文学班の雑誌が印刷できなかったという出来事が記される。

《六月二日》

文学班の回覧雑誌はとうとう刷れなかった。私の書き方が悪かったのか、細川先生の下さった原紙が悪いのか、ちっとも現われてこないが、しかし、私はさして苦痛でない。ひとつ、「十七のころ」という小説ができたのだ。これはすこし長いが、この雑誌へ入れようと、金曜日一日つぶしてガリガリ原紙を引っかき、九枚も書いた。それが全部だめなのである。

今日は頭痛がし、小指や手指に傷がつき、空は曇りがちで、母の就職口はつぶれ、気の悪いことおびただし。

「十七のころ」を載せる予定であった雑誌は、印刷できなかったというのである。この日の記述からすれば、現存の『青い壺』に「十七のころ」が掲載されていないのは、物理的な問題であったとも解せよう。ただし、ここには「文学班の回覧雑誌」とのみあって、『青い壺』という題名は記されていないことが注意される。

次の条には、文学班の長として、相変わらず雑誌の印刷に苦戦し

ている様子が記されている。

《六月五日》

まるで謄写版屋の丁稚かなんぞの如く、文芸部だの、短歌会だのと追いまわされているくせに、それがうまく刷り上がらず、写らなかったり、そばかすが出来たりして、一枚十何銭という貴重な紙を消耗ばかししている。それで気を腐らせて勉強にも身が入らないのは、全くつまんないと思うが、文学班長の責任上どうも、忌避できなくて。

「日記」の次の条には、ようやく雑誌が刷り上がったことが記されている。

《六月二十一日》

私はまた、やっと文学班の雑誌が刷れたと思っていたところが、あとからあとから、くれと言ってこられたのには弱った。足らないのだ。

私の「十七のころ」は本城先生が、いかにも適切な批評をして下さった。もう一度書き直す。

「文学班の雑誌」が刷り上がったとは書かれているが、「十七のころ」は掲載されたのかどうかについては書かれていない。予定通り掲載されたのか、あるいは書き直すために引き下げたのであろうか。

さらに「日記」を読み進むと、文学班が発行する二冊目の雑誌について書かれている条がある。

《十月十八日》

このところ文学班の原稿締切をも控えて私は忙がしく、それに、十一月に入ればすぐ試験があるだろうと思う。

《十二月十三日》

今日、やっとのことで「青い壺」を仕上げた。刷ってみると、プリント屋が下手くそで原紙の書きようが拙いため、ひどく見劣りしてつまらなかった。それに一五〇冊の予定が一四〇冊になってしまった。で、あげる雑誌はごく少しにした。

ここに『青い壺』という雑誌名が書かれている。現存する『青い壺』には「1号」とあるが、文学班の二冊目の機関誌であったことが分かるのである。

ところが、『青い壺』の奥付には「昭和二十一年十一月二十日」とある。この奥付の月日は、「日記」の日付とは一致しない。ただし、文学班の一冊目の雑誌の発行された六月とは大きく異なるが、二冊目の十二月十三日という日付は近い。原紙の仕上がった日と刷り上がった日とが一致していないと考えるしかない。

また、十二月十三日の「日記」からは、『青い壺』が「下手くそ」なプリント屋の文字で書かれたことが分かる。一冊目の機関誌の印

刷については、六月二日の「日記」に生徒たちで分担し、編集責任者の田辺聖子も原紙を書いたと書かれている。

『しんこ細工の猿や雉』には、「まだ町には印刷屋もないので、学校から原紙と紙をもらい、生徒が交代でガリ版を切った」とあるのは、一冊目の機関誌の体験を基にしていることがわかる。また、「日記」に『青い壺』の発行部数が「一五〇冊の予定」とあることは、『しんこ細工の猿や雉』に「百五十冊刷ったが、またたくまに売れてしまった」に符合する。

このように見てくると、『しんこ細工の猿や雉』が、実際の体験をそのまま書いてはいないことが分かる。もちろん自伝的とはいえ小説であるから当然のことであり、むしろ問題はその創作意図であろう。

以上の「日記」の記事を整理すると、文学班の機関誌発行と田辺聖子の掲載作品との関係は下記のようになる。

①昭和二十一年六月、樟蔭女子専門学校の文学班が、一冊目の機関紙、手作りの回覧雑誌を発行。原紙は生徒たちが分担して書いた。田辺聖子は編集長を務め「十七のころ」という短編を掲載したと考えられる。

②昭和二十一年十二月、樟蔭女子専門学校の文学班の二冊目の雑誌を『青い壺』（1号）と題して発行。原紙はプリント屋が作成した。田辺聖子は「ゆみ子」という短編を掲載した。

田辺聖子はこれらの体験を題材にして、ひとつのエピソードを作り上げて、後年の自伝的小説に描いたと言う経緯が明らかになるのである。

ところが、さらなる疑問が浮上する。現存する『青い壺』には、「ゆみ子」という作品が掲載されていたにもかかわらず、『しんこ細工の猿や雉』には「十七のころ」を載せたと書き、しかも、前引のように「おとなしい夢みがちの女の子と、俗人の代表のような両親との対比をねらった小説で、それだけのものである。われながら低調で冴えなかった」と自嘲的な評を書いているのは、何故かという疑問である。

「ゆみ子」も「十七のころ」も、少女時代の未発表作品であり、読者が知り得ない作品である。二つの作品を入れ替えて書いた意図は何であったのだろうか。

四、『青い壺』に掲載された「ゆみ子」

「日記」には、『青い壺』に掲載した作品名は書かれていない。ただし、発行年の大晦日に、一年を振り返る記述の中に、唐突に「ゆみ子」という名前が出てくる。

《昭和二十一年十二月三十一日》

学生生活としては、一番この年が楽しく有意義であったといえよう。文学班としても活躍し、成績でも首席が取れ、そして

学校生活は文芸会あり音楽会あり、短歌会、文学班雑誌発行、とつづいて楽しいことが続々とあった。

（中略）

そして、私の運命はどうなるのかしら。私を引き回すほどの人が果たして―すべての少女の場合におけるように―出現してくるのだろうか。ある意味で私は「ゆみ子」に近い。

前述のごとく「ゆみ子」は『青い壺』に掲載されている田辺聖子の短編の題名となった主人公の名前である。この一文からは、自分の分身のような存在として共感していたことが窺える。しかし何故か、「日記」には「ゆみ子」という作品については一行も書かれていない。「ゆみ子」は、どのような作品であったのかを見ておこう。[7]

主人公の佐野ゆみ子は二十歳、多くの兄弟姉妹の真ん中に育ち、目立たないおとなしい性格で、女学校を卒業して事務所に勤めている。「恐ろしく空想家で」未だに童話の世界の王子様とお姫様の存在を夢想しているほどである。

ある日、ゆみ子は、仕事帰りに立ち寄った書店で、偶然に兄の友人の大学生・笹井と出会い、喫茶店に誘われる。笹井は、以前に何度か家に遊びに来たことがあり、秀才で聡明だが、病弱で翳りの有る青年で、ゆみ子は好意を抱いている。笹井は、ゆみ子の兄が大学を中退した後の消息を聞きたかったのだが、ゆみ子は自分に恋心を持っていると空想して胸をときめかせる。書店や喫茶店の場面では、ゆみ子が空想を交えて笹井の言動を眺める様子が描写される。喫茶店で二人は何気ない会話を交わして別れるだけだが、ゆみ子にとっては夢のような美しいひと時で、「薔薇のような雰囲気は彼女をとりまき、彼女はこよなく幸福だった」と描かれる。帰宅したゆみ子は、帰りが遅くなったことを、恋人に会ったからだろうと兄にからかわれ、笹井の「翳り深いひとみ」を思い出し、「そんな俗悪なことばで現はされたくない」と反発して奥の間に入る。

ところが、最後の場面で「突然何もかも光を失ってきだした」のである。笹井も特別な存在ではなく、「肺病の学生にすぎなく」なってしまう。「ありふれた喫茶店でケーキを二つ三つたべて別れた」にすぎない現実を直視するのである。「ゆみ子」は、次の一文で終わる。

さびしい事だったが、夢と幻とはおもむろに彼女からはなれ、そして彼女、ゆみ子もいつしか人の世の荒波の中に、知らぬ中に押し出されてゐる事をやうやくおぼろげながら、感じ始めたのだった。

空想の世界に生きていたゆみ子が、次第に現実世界で生きることに目覚め始めるというテーマで書かれた作品である。ゆみ子に、自分の似姿を見ているという「日記」の記述は、表面的には自らの内に空想の恋に恋する心情を見出しているのであるが、同時に、戦中戦後の未曾有の体験を経て、もはや空想の世界に留まってはいられないという覚悟も込められていよう。

しかし、「日記」中には、「ゆみ子」という短編については何も記されていない。『青い壺』が完成した日にも、その作品名すら書かれていない。おそらく、女学生時代から多作であった田辺聖子にとっては、難なく仕上げた作品であったと考えられる。一方、「十七のころ」については執筆の過程をたびたび「日記」に記している。両作品に取り組む、田辺聖子の執筆姿勢が異なっていたことは確かであろう。

五、「十七のころ」と田辺聖子

「日記」の記述を辿ってゆくと、「十七のころ」に対する田辺聖子の並々ならぬ思い入れが浮かび上がってくる。「十七のころ」は、回覧雑誌の印刷に失敗した日も「しかし、私はさして苦痛でない。ひとつ、『十七のころ』という小説ができたのだ」と、誇らしげに書いているほどである。田辺聖子にとって、「十七のころ」は、どのような意味を持つ作品であったのだろうか。「日記」を手掛かりに探ってゆきたい。

この作品が、文学班の回覧雑誌のために書かれた小説であることは、前述した通りである。しかし、田辺聖子は、学内雑誌に載せるだけに終わろうとは思っていなかったようである。

昭和二十一年五月十九日に、田辺聖子は友人と共に、全国書房の梅田氏に京都で会っている。「埋もれた宝を捜す」という「集い」に参加することを勧められたようである。この日の出来事は『しんこ細工の猿や雉』にも詳しく描かれている。「日記」と関連する注目箇所を抜粋しておきたい。

・クラスの友人の知人に、東国書房という出版社の人がおり、彼女は

「何か、小説かく人さがしてはるみたい。逢うてみたら?」

というので、連絡してもらった。放送局でも出版社でも、人や作品を募集している新人登場時代であるらしい。

荒唐無稽の小説でも、ひょっとして売れないかしらと私は考えた。

・東国書房の人は西田氏といって、中年のおだやかな表情の男性で、三十くらいの女性と二人で私を待っていた。女性は私と同じような目的や期待で、西田氏に逢いに来たらしい。

・西田氏は、吹けば飛ぶような学生の私にも、きわめて親切で礼儀正しく、

「埋もれた宝をさがす、という意味も、私どもにはありまして、若い新人の方々に期待してますねん」

と関西なまりのやわらかい物の言いぶりであった。

・それに、「何かお書きになったらお見せください」と西田氏が鄭重にいったのだ。私はこういう一人前のオトナの前ではさすがに、「海賊島」やら「古城の三姉妹」などという荒唐無稽小説を出すことは憚られたが、しかし何だか今にも、西田氏の期待に副うホンモノの作品が出来上がりそうに思われて、うれし

かった。

ここに、「東国書房」の「西田氏」とあるのは、「日記」では「全国書房」の「梅田氏」とある。固有名詞を変えて書かれている。

この後には、母親は、東国書房の西田氏に早く作品を見せて、吉屋信子のような女流作家を目指せと諭す。しかし、小説中には、そうすることに気が進まない理由を、縷々述べている。

・『古城の三姉妹』のように、波の間から海坊主があらわれ、それが古城の廊下や、ドアのノブを濡らしてゆく、という怪奇小説を、あの温厚で良識的な、礼儀正しい紳士の西田氏が双手をあげて歓迎するとは、さすがの私にも思えなかった。

・本庄先生に褒められ、東国書房の西田氏に胸張ってさし出せるような、ホンマモノを書こうとしても、私は気が進まないのである。

小説では、「東国書房」との関わりについては、京都での一度の出会いを描くのみで終わっている。因みに「本庄先生」は、「日記」によれば、文学班の顧問の「本城先生」のことである。

「日記」の記述とは相違する点もあるが、樟蔭女子専門学校時代から作家デビューへの道を模索していたことは事実である。

「日記」には、全国書房の梅田氏に会った翌日に、京極で観た映画「王国の鍵」と比較して自作「十七のころ」を顧みている。

《五月二十日》

「王国の鍵」はまったく素敵だった。フランシスという宣教師の支那における、生活、闘争、そういうものを描いてあった。彼の青年時代からの硬骨な、反撥力のある、しっかりした性格が羨ましくさえ思えるのだ。私は反撥力がない。それを恐れる。いま書いている「十七のころ」も、無気力な少女の生活を描いてみようと試みたが、主人公・泉の性格は、私が型にはめると、どんどん嫌がって駆け出し、手に負えぬじゃじゃ馬みたいに、忽焉として前にありかと思うと後ろに逃げ、銀鈴のごとく笑い、暴風のように怒る。しかし、私が泉をとらえて未完成の場面を作りたてると、泉は天才的な瞑想に沈んだ少女に一変する。彼女は、画の天才であろうと思わせる。しかし周囲も本人も気付かず埋もれてゆく。それに気づくのは、彼女の友達である少年だけだ。しかし、少年の家も貧しく、そして少年は力を持たない。

「王国の鍵」は一九四六年五月に日本でも公開されたアメリカ映画である。グレゴリー・ペック演じる主人公の造形に、田辺聖子は感動している。映画を見ても執筆中の作品と結び付けて考えてしまうのである。この条には、「十七のころ」の主人公をどのように造形しようかと格闘する様が描かれている。作品の構想も記されているのだが、ここに書かれている主人公の友人の「少年」は、現存の「十七のころ」には登場しない。構想だけに終わったのか、あるい

は執筆途中で削除したのか、いずれかであろう。
次の日も主人公「泉」のことが頭を離れないのだが、作品の構想を練っている状態を楽しんでいるようである。

《五月二十一日》
明日は、本城先生はいらっしゃらぬ。何かよいことをして過ごして下さいと仰有っていたが、原稿はまだ集まらず、その上、講義して下さる先生はなしときているので、いっそ休みにして他の科へゆきたいと思う。
（中略）
いそがしくて何だか生き甲斐を感じる。初夏だし、幸福だ。

が、「泉」はどうなるだろう。私は今後、いかに泉の運命を定めるべきか知らぬ。泉は勝手にするだろう。

「原稿はまだ集まらず」とあるのは、文学班の一冊目の雑誌の原稿のことであろう。そして、「十七のころ」の主人公・泉のことを自らの感情に関連させて記すのである。ここに、わずか一文だが、注目すべき記述が見いだせる。「初夏だし、幸福だ」の一文である。この一文は、「十七のころ」中の一節、すなわち、「もう庭には一ぱいに明るい新緑が流れている。目覚めるばかり、萌え出た緑だった」と描かれる明るい五月の初夏の光景となるのである。
戦後の混乱期の中で生き方を見いだせない無力な少女・泉が、日々苦悩する姿を描く中で、ひと時だけ「幸福」に浸る場面が描かれる。それが初夏の光景である。麦や豌豆や玉葱の畠の作物の様子、雑草の新緑、空高く漂う白雲等々の美しい自然描写が続き、「祝福すべき五月の朝だった。そよ風は流れ、鳥はうたってゐた。泉は幸福な思ひに打たれた」と、泉は初夏の光景に見入って幸福感に浸る。真の人間の幸福の表象として「生命力に満ち溢れた初夏の光景」が描かれている場面である。この作品の主題に関わる重要なシーンに、「日記」の一文に記された実感が、生かされたと言えよう。
しかし、翌日には、「十七のころ」を思うように書き進められない悩みが記されている。

《五月二十三日》
今こそ新人登場時代だ。それだのに私は今になって、何も出来なくなってしまった。この数日間、私は、頭がからっぽになっている。何も考えられない。泉のことはどうなるか―。
（中略）
私はいま何か気分転換を図らないと、たしかにダレていて頭の中は埃っぽくかさかさと音がして、妙に熱っぽくザラザラした砂が厚く脳の上に積み重なったようだ。私にかつての日のインスピレーションは、再び訪れないのであろうか。

「十七のころ」の主人公をいかに描くかという悩みは、そのまま、新人として文壇にデビューを果たし得る作品を完成する事の困難さへと繋がっているのである。

前引した『しんこ細工の猿や雉』の「本庄先生に褒められ、東国書房の西田氏に胸張ってさし出せるような、ホンマモノを書こうとしても、私は気が進まないのである」という一文は、一種の韜晦であったといえよう。「日記」によれば、実際のところは、「十七のころ」を、全国書房に持ち込むべく、顧問の本城先生の批評も得て、推敲を重ねていたのである。

《七月一日》

早く全国書房の梅田さんに、小説を見て頂こうと思うので、さっそく本城先生に言われた通り、「十七のころ」を直してみようと思ったが、なかなか難しい。泉の苦悶の焦点は虚無への反発にあるのに、ややもすれば月並な感傷におちいり、それに対照すべき良子の存在が観念的になりすぎる。でも、とにかくやってみる。

「十七のころ」には、戦後の食糧難により親子心中が頻発する世相、全国の大学生が引揚者の救済を目的に組織した在外父兄救出学生同盟の活動、戦後の日本社会を再建するための文化復興運動や新時代を築くマルクス思想の学習会等々が描かれている。

そのような時代に生きる良子は、自活して女子医学専門学校に学び、戦後社会に貢献し、意欲的に生きているのだが、新時代を生きる女性を象徴する存在でありつつも、いまだ真実の生活に触れ得ない女性として描かれている。「観念的になりすぎる」ことのないようにと、人物造形に腐心した成果といえよう。

泉は、激変する時代の中で、自らの生き方を見つけることが出来ず苦悩しているのだが、両親の庇護と束縛から抜け出すことは出来ずに、「深い絶望と暗い虚無感」「得体の知れぬ不気味な魂の圧迫感」苦しんでいる。しかし、泉は、良子の生き方に憧れつつも、冷徹な目で、その生き方を「薄っぺらな雷同的な、虚勢的なもの」と看破する。「日記」に言うところの「月並みな感傷」に浸るばかりでない泉を造形しようと試みた成果といえよう。

しかし、次の条のように、並々ならぬ苦心と推敲を重ねたにも関わらず、「十七才のころ」が活字化されることはなかったのである。

《昭和二十二年一月十一日》

この間、田村先生からお手紙が来た。

「十七のころ」は劇的シーンに乏しく、盛り上る力がない。ケースの中の人形でなく、人間を書け。人を打つのは、その盛り上る力によってだが、これはそうした血の通うものがない。

大体こういうことだった。私はほんとに、はっとするものがあった。こういう点について、私は漠然とした不満を感じていたが、しかしそれをつきとめることは出来なかった。それがハッキリ指摘された。本城先生にいわれた言葉もこれに似ていた。

だんだん私は沈む。私に才能はないのかしら。しかし、行きつくし、倒れるまでやろう。

『しんこ細工の猿や雉』において、「十七のころ」を「われながら低調で冴えなかった」と評しているのは、このような当時の評価の反映であったろう。推敲を重ねたにもかかわらず、ついに活字化されることはなかったようである。その結果に落ち込み、自らの才能を疑うのだが、田辺聖子が作家への道を前進する意欲を失うことはなかったのである。

六、おわりに

以上、見てきたように、「日記」に繰り返し言及される記述からは、田辺聖子がいかに真剣に「十七のころ」を執筆したかが看取される。しかも、田辺聖子が「十七歳」であったのは一九四五年に当たる。周知のごとく第二次世界大戦が終戦した年である。まさに「驚天動地」[8]の年であり、私生活でも父親に死別して生活が激変した年であった。

執筆当時に評価されることはなかったが、「十七のころ」は田辺文学の原点ともいうべき作品である。登場人物は、泉と両親と先輩の四人、場面は自宅と洋裁学校への通学路の二場面、作品内に流れる時間はわずかに二日、春と夏とが入れ替わる四月末日と五月一日の二日である。このように一切の無駄をそぎ落とされていて、緊密な構成に仕上がっている。劇的な要素こそ無いが、戦後の混乱期に、真の人間の幸福とは何かという、きわめて重要なテーマに取り組み、万物の生命力の充溢する初夏の光景によって幸福を表象することで、明確な一つの指針を暗示している。後年の作品の基になる手法や文体、そして田辺文学に通底するテーマがすでに見出せるのである。[9]

「十七のころ」と題した作品に対して、田辺聖子が強い愛着を持ち続けていたことは想像に難くない。それゆえに、後年の自伝的小説『しんこ細工の猿や雉』の中に、青春時代の記念碑的作品として、書き残したと考えられるのである。

それにしても、「日記」の随所に横溢する創作や人生に対する真摯な姿勢には圧倒される。社会や人間に対する洞察や、日常茶飯事から大阪大空襲という空前の惨状までをも描く、その確かな描写力には驚かされる。「日記」は、田辺聖子の作品・作家研究にとって貴重な資料であると同時に、興味深い「作品」といえるのである。

（注）

（1）本文の引用は、すべて『田辺聖子　十八歳の日の記録』（文藝春秋、二〇二一年刊）による。

（2）論旨の都合上、一部、拙稿「田辺文学の原点―少女時代の作品「十七のころ」―」（『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第三巻、二〇一三年一月）と重複する部分がある。

（3）拙稿「田辺聖子の少女時代の作品―『伸びゆく者』を中心に―」（『樟蔭国文学』第五七号、二〇二一年三月）において、自伝的小説に少女時代の作品を引用する方法について論じた。

（4）『しんこ細工の猿や雉』は一九七七年三月～一九七九年一二月まで『別冊文芸春秋』に連載された自伝的小説。後に『田

辺聖子全集1』（集英社、二〇〇四年）に所収された。本文の引用はすべて後書による。

（5）『青い壺』（大学図書館所蔵）については、拙稿「『青い壺』のこと」（樟蔭学園報『くすのき』一五〇号、二〇〇六年三月）で解説した。

（6）住友元美「資料紹介『十七のころ』」（『樟蔭国文学』第四九号、二〇一三年三月）。本文の引用は文学館所蔵資料によるが、旧漢字を新字体に直す等、表記は一部変えた。

（7）本文の引用は図書館所蔵資料によるが、旧漢字を新字体に直す等、表記は一部変えた。

（8）『月刊面白半分』一九六五年、三月号による。『欲しがりません勝つまでは』（ポプラ文庫、二〇〇九年）にも、十七歳の終戦時の感慨を「天が地に。地が天にひっくりかえった」と表現している。

（9）注2の拙論参照。